様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５０７４２

研究課題名（和文）スポーツ選手の心理的発達プロセスの検討：スポーツ発達心理学の構築に向けて

研究課題名（英文）Psychological developmental process of athletes: Constructing Developmental Sport Psychology

研究代表者
竹之内　隆志（TAKENOUCHI, Takashi）

名古屋大学・総合保健体育科学センター・教授

研究者番号：５０２５２２８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，危機経験と心理社会的発達課題の達成が中学・高校・大学スポーツ選手のパーソナリティと心理的競技能力の発達に関連するという仮説を検討した．その結果，仮説は部分的に支持された．また，要因間の関連の内容は発達段階間で異なることも示された．これらの発達差に基づいて，スポーツ選手の心理的課題の発達的変化を検討する「スポーツ発達心理学」という新学問領域の構築必要性が示唆された．

研究成果の概要（英文）：The hypothesis that crisis experiences and the achievement of psychosocial developmental tasks were related to the development of personality and psychological competitive ability of junior high school, senior high school and university athletes was investigated. The results indicated that this hypothesis was partially supported and that the content of the relationships between the variables differed, depending on the developmental stage. Based on these developmental differences, we suggest the need to develop a new field of study named “Developmental Sport Psychology” that focuses on developmental change in psychological tasks of athletes.

研究分野：複合領域

キーワード：スポーツ選手　パーソナリティ　自我発達　心理的競技能力　危機経験　心理社会的発達課題　スポーツ発達心理学

１．研究開始当初の背景

スポーツ心理学の研究課題については発達的な観点から検討することが重要と考えられる課題があるが，必ずしもそのような検討が十分に行われているわけではない．そこで，「発達」を研究の前提とした学問領域の構築が必要と考え，スポーツ心理学領域で従来扱われてきた課題のうち発達論的観点を含む課題を取り上げ，加齢に伴う発達的変容を検討する「スポーツ発達心理学」という学問領域構築の必要性・可能性を数年前から検討してきた．

具体的には，スポーツ選手のパーソナリティ発達（自我発達）および心理的競技能力（忍耐力や自己コントロール能力など）の発達に着目し，中学期から大学期に至るこれらの発達プロセスを，スポーツ選手の危機経験（悩んだり努力したりする経験）と心理社会的発達課題への取り組みの影響を加味しながら検討してきた．そして，スポーツ選手のパーソナリティと心理的競技能力の発達の水準や特徴が発達段階間で異なること，また，これらの発達には危機経験や心理社会的発達課題の達成が関連していたが，関連の内容は発達段階間で異なることなどを確認した．

これらのことから，スポーツ選手の心理的課題を発達段階ごとに検討したり，加齢に伴う発達的な変化を重視しながら検討したりする「スポーツ発達心理学」構築の必要性が示唆された．しかし，取り上げた要因間の関連性や発達段階による関連の質的変化についてさらに詳細に検討することが今後の課題となっていた．

２．研究の目的

本研究では，これまでの研究と同様に，スポーツ選手のパーソナリティ発達（自我発達）および心理的競技能力の発達に着目し，中学期から大学期に至るこれらの発達プロセスを，スポーツ選手の危機経験と心理社会的発達課題への取り組みの影響を加味しながら検討する．具体的には，これまでの研究において，「スポーツ選手の危機経験は心理社会的発達課題への取り組みの表れであり，それゆえ危機経験はスポーツ選手の自我発達や心理的競技能力の発達に関連する」といった仮説が示唆されてきた．このことは，図 1 に示すように危機経験，心理社会的発達課題の達成，心理的発達（自我発達と心理的競技能力の発達）が正の関連を有することを意味している．そこでこのような要因間の関連を検証し，さらに発達段階ごとの関連の質の違いを検討し，中学期から大学期に至るスポーツ選手の心理的発達プロセスを明確にする．また，これらの結果に基づいて，スポーツ選手の心理的課題を発達段階ごとに検討する意義や必要性，すなわち「スポーツ発達心理学」の構築可能性について再検討する．

３．研究の方法

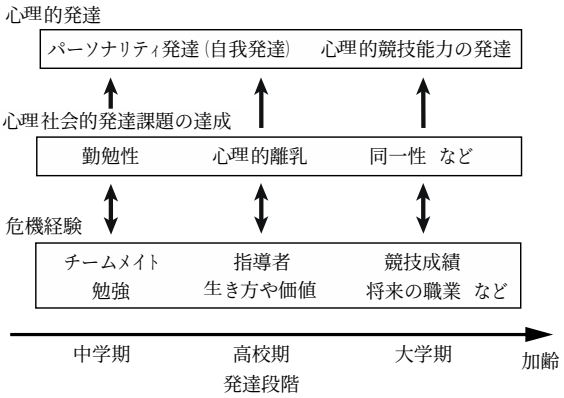

図１ スポーツ選手の心理的発達プロセスの分析モデル

(1)分析対象者

スポーツ選手に調査を実施し，回答に不備のなかった中学・高校・大学選手計 715 名（男子 390 名, 女子 325 名）を分析対象者とした．

(2)調査内容

①危機経験

スポーツ選手の危機経験の調査結果（竹之内ほか，2008）に基づいて，スポーツ選手が迷ったり悩んだりしやすいと考えられる運動領域での事象（チームメイトとの関係，部の指導者との関係，競技成績や技術の向上，などの 5 事象）および日常生活領域での事象（勉強，将来の職業，望ましい生き方や価値，などの 7 事象）を設定した．そして，各学校期内における個々の事象での危機（迷ったり悩んだりした経験）と自己投入（個々の事象を重視して努力した経験）の 2 つの経験を調査した．

②心理社会的発達課題の達成度

先行研究（中西・佐方，2001；岡本・上地，1999 など）を参考として，信頼性，勤勉性，同一性，親密性，心理的離乳の 5 つを取り上げて，それらの達成度を調査した．なお，これら以外にも，男性性と女性性といった性役割の獲得の程度についても調査していたが，これらについては発達課題というよりもパーソナリティとして考える方が妥当であるといった指摘を学会発表の際に受けたため，最終的な分析には用いなかった．

③パーソナリティ

自我発達を変数として取り上げ，文章完成テスト 12 項目版（竹之内ほか，2002）で測定した．自我発達段階としては 8 段階が設定されており，まず 12 項目の各々について段階を評定し，Picano（1987）が作成した累積規則に基づいて最終的な自我発達段階を決定した．最も低い段階である衝動的段階を 1，最も高い段階である自律的段階を 8 というように段階に応じて得点化した．

④心理的競技能力

徳永・橋本（2000）が作成した診断検査で測定した．忍耐力，勝利意欲，自己コントロール能力などの 12 個のスポーツ場面で必要となる心理的能力が測定された．

４．研究成果

図１のモデルに従って要因間の関連を検討し，以下の結果を得た．

(1)危機経験と心理社会的発達課題の達成との関連

各事象での危機・自己投入得点と心理社会的発達課題の達成度との相関を検討したところ，どの発達段階においても危機得点は概して心理社会的発達課題の達成度と負の関連を示し，仮説とは一致しなかった．しかし，自己投入得点は概して心理社会的発達課題の達成度と正の関連を示し，仮説を支持する結果であった．

仮説を支持していた自己投入得点と心理社会的発達課題の達成度との関連の内容を発達段階間で比較すると，異なる部分がみられた．例えば，本研究で取り上げた心理社会的発達課題のうち同一性は中学期から大学期のすべての発達期で取り組むべき課題と考えられることから同一性に着目し，同一性の達成度に対して自己投入得点が有意な正の関連を示した事象を性別・発達段階別にまとめたものが表１である．男子では，どの発達段階においても「勉強」と「将来の職業」での自己投入が同一性に関連していたが，これら以外にも，中学では「競技成績」，高校では「生き方や価値」と「父親」，そして大学では「競技継続」と「チーム運営」での自己投入が同一性に関連するという違いがみられた．女子では，中学と大学とで同一性に関連した事象が異なっていた．

表１ 同一性の達成に自己投入が関連した事象

	発達段階	運動領域の事象	日常生活領域の事象
男子	中学	競技成績	**勉強，将来の職業**
	高校	なし	勉強，将来の職業，生き方や価値，父親
	大学	競技継続，チーム運営	勉強，将来の職業
女子	中学	**なし**	将来の職業
	高校	なし	なし
	大学	なし	生き方や価値，父親，母親

(2)危機経験と自我発達との関連

各事象での危機・自己投入得点と自我発達得点との相関を検討したところ，どの発達段階においても危機得点・自己投入得点は概して自我発達得点と正の関連を示し，仮説を支持する結果であった．

自我発達に関連する事象を明確にするために，危機得点と自己投入得点を説明変数とし，自我発達得点を基準変数とする重回帰分析を事象ごとに実施した．重相関係数が有意であった事象を性別・発達段階別に表２に示したが，男子では中学と高校とで自我発達に関連した事象が異なり，女子では中学と大学とで自我発達に関連した事象が異なっていた．なお，男子の大学と女子の高校では自我発達に関連する事象がみられなかったが，竹之内ほか（2006，2012）ではこれらの発達段階でも自我発達に関連する事象が報告されている．先行研究と本研究とでは危機経験の測定方法が若干異なっており，このことが結果の違いの原因となっている可能性があり，今後の検討課題といえる．

表２ 自我発達に危機経験が関連した事象

	発達段階	運動領域の事象	日常生活領域の事象
男子	中学	チーム運営	**勉強，生き方や価値**
	高校	チームメイト，競技成績	勉強，将来の職業，異性の友人，同性の友人
	大学	なし	なし
女子	中学	**競技成績**	なし
	高校	なし	なし
	大学	**チーム運営**	**なし**

(3)危機経験と心理的競技能力との関連

各事象での危機・自己投入得点と心理的競技能力合計点との相関を検討したところ，どの発達段階においても危機得点は概して心理的競技能力合計点と負の関連を示し，仮説とは一致しなかった．しかし，自己投入得点は概して心理的競技能力合計点と正の関連を示し，仮説を支持する結果であった．

後者の仮説を支持する結果に着目し，心理的競技能力合計点に対して自己投入得点が有意な正の関連を示した事象を表３に示したが，発達段階間での違いがみられた．男子では，どの発達段階においても，「チーム運営」での自己投入が心理的競技能力に関連していたが，さらに，高校では「競技成績」と「将来の職業」，大学では「勉強」と「将来の職

表３ 心理的競技能力に自己投入が関連した事象

	発達段階	運動領域の事象	日常生活領域の事象
男子	中学	チーム運営	**なし**
	高校	競技成績，チーム運営	将来の職業
	大学	チーム運営	勉強，将来の職業
女子	中学	**競技成績**	将来の職業
	高校	**競技成績**	なし
	大学	競技成績	将来の職業，母親

業」での自己投入が心理的競技能力に関連していた．女子では，どの発達段階においても，「競技成績」での自己投入が心理的競技能力に関連していたが，さらに，中学では「将来の職業」，大学では「将来の職業」と「母親」での自己投入が心理的競技能力に関連していた．

(4)心理社会的発達課題の達成と自我発達・心理的競技能力との関連

5 つの心理社会的発達課題の達成度を説明変数とし，自我発達得点および心理的競技能力合計点を基準変数とする重回帰分析を実施し，標準偏回帰係数が有意であった心理社会的発達課題を表 4 に示した．自我発達に対しては正の関連を有する心理社会的発達課題は男女ともにみられず，仮説とは一致しなかった．

心理的競技能力に対しては，正の関連を有する心理社会的発達課題がみられ，男子では，どの発達段階においても「勤勉性」が関連し，さらに，中学では「信頼性」，「親密性」，「心理的離乳」が，大学では「同一性」と「親密性」が心理的競技能力に関連していた．女子においても，「勤勉性」がどの発達段階でも心理的競技能力に関連していたが，さらに，中学では「同一性」と「心理的離乳」が，高校では「同一性」が心理的競技能力に関連していた．

表 4 自我発達および心理的競技能力に関連した心理社会的発達課題

	発達段階	自我発達に関連した発達課題	心理的競技能力に関連した発達課題
男子	中学	なし	信頼性，勤勉性，親密性，心理的離乳
	高校	信頼性(負の関連)	勤勉性
	大学	なし	勤勉性，同一性，親密性
女子	中学	なし	勤勉性，同一性，心理的離乳
	高校	なし	勤勉性，同一性
	大学	なし	勤勉性

(5)まとめ

本研究では，「危機経験（危機と自己投入）→ 心理社会的発達課題の達成 → 自我発達・心理的競技能力の発達」といった関連を想定していた．しかし，危機（迷ったり悩んだりすること）は心理社会的発達課題の達成や心理的競技能力と負の関連を示し，また心理社会的発達課題の達成と自我発達との正の関連はみられなかった．これら２点については仮説通りではなかったが，これら以外の正の関連は確認された．その関連を整理すると，一つは「危機経験（危機・自己投入）→ 自我発達」という関連であり，もう一つは「自己投入 → 心理社会的発達課題の達成 → 心理的競技能力の発達」という関連である．つまり，自我発達と心理的競技能力の発達に影響する要因は異なっている可能性が示唆される．

そして，前者の関連についても後者の関連についても，関連の質は概して発達段階によって異なっていた．つまり，スポーツ選手のパーソナリティ（自我発達）は危機経験の影響を受けながら発達し，心理的競技能力は自己投入や心理社会的発達課題の達成の影響を受けながら発達するが，影響するそれらの内容は個々の発達段階で変容しながら心理的発達が促されるといったプロセスが示唆される．このように，スポーツ選手の心理的発達に関連する内容が発達段階で異なることが示されたことから，スポーツ選手の心理的課題を発達段階ごとに検討したり，発達的変化を考慮して検討したりする「スポーツ発達心理学」といった学問領域の構築の必要性・可能性が改めて示されたと考えられる．

本研究では危機経験が他の要因と仮説通りの関連を示さない部分があった．この原因としては，危機経験の測定方法の問題が考えられる．また，危機経験がスポーツ選手の心理的発達を促進するといった因果性を仮定していたが，心理的発達の水準が低いため危機経験が生じるといった因果性も想定され，これらが混在したことも原因かもしれない．そこで，今後の課題としては，危機経験の測定方法を再検討しながら，縦断的研究を行うことが必要である．

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 竹之内隆志・大畑美喜子，中学運動選手における心理社会的発達課題の達成と心理的競技能力，総合保健体育科学，査読無，38，2015，13-19.

〔学会発表〕（計３件）

① Takenouchi, T. and Oohata, M. Developmental differences in achieving psychosocial developmental tasks and psychological competitive ability among male Japanese athletes. 21st Annual Congress of the European College of Sport Science. 2016.7.8. Vienna, Austria.

② Takenouchi, T. and Oohata, M. Achievement of psychosocial developmental tasks and psychological competitive ability in Japanese college athletes. 14th European Congress of Sport Psychology. 2015.7.17. Bern, Switzerland.

③ Takenouchi, T. and Oohata, M. Achievement of psychosocial

developmental tasks and psychological competitive ability of Japanese junior high school athletes. 7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress. 2014.8.8. National Olympics Memorial Youth Center, Tokyo.

６．研究組織

(1)研究代表者

竹之内　隆志（TAKENOUCHI, Takashi）
名古屋大学・総合保健体育科学センター・教授
研究者番号：50252284